男女共同参画情報誌

りぷる さっぽろ

特集
男子たちの現在
そしてこれから

コラム
評論家・コラムニスト
常見 陽平 さん

2015 Vol.37 冬

これからの男子の生き方、働き方、居場所を考える

●私とは何か、という問い

皆さんに問いかけたい。

「あなたは、どんな人なのですか?」

いかにも学生の就活で聞かれそうな質問だ。ただ、漠然としていて深い問いである。まだ、何度も面接を受ける就活生の方が答えやすい質問かもしれない。

より噛み砕いて、こう聞いてみることにしよう。

「あなたはいくつの組織、コミュニティに参加していますか?」

「あなたには、いくつの役割がありますか?」

「あなたは、いくつの顔を持っていますか?」

そう、自分というものは一言で語れない。様々な組織、コミュニティに属しているし、様々な役割、顔がある。

芥川賞作家の平野啓一郎氏は『私とは何か』(講談社)という本で、「分人」というコンセプトを打ち出した。様々な場において、様々な自分がいる。それは全て、本当の自分である。

私の話をしよう。私も、様々な自分を生きている。物書きをしている。雇用・労働問題に関する硬派な文章を書くこともあれば、カルチャーについて実にゆるいエッセイを書くこともある。大学で非常勤講師をしている。「先生」と呼ばれる機会が増えた私だけれど、2012年から2年にわたって大学院の修士課程にも在籍していた。そこでは20代前半の人と同じく院生であった。メディアでコメンテイターの仕事をすることもある。研修の講師をすることもある。家庭では夫であり、札幌の実家に帰れば、親の前では一生息子である。2014年の7月には通っていた札幌市立藤野中学校の卒業25周年同窓会があり、市内で工務店を経営する友人、すすきのでカラオケパブを経営する友人と幹事をしたが、ここでは「元生徒会長の常ちゃん」だった。東京の下町に住んでいるが、一応、町内会の役員をしていて、そこでは「青いマンションに住んでいる、常見さんのところの若旦那」だ。

このように人は、いろんな自分を生きている。

●あえて、会社以外の居場所を考えてみる

「企業戦士」「会社人間」「社畜」

会社員の別の言い方で、こんな言葉がある。後者になるほどネガティブな印象になるが、とはいえ、会社に属していることは、変わらない。「自分は社畜だ」と言う人は、ダメ人間のようでむしろ状況を客観視しているとも言える。「企業戦士」なる言葉で自分を鼓舞している（あるいは鼓舞されている）人は危険で、「社畜」と自虐的になる人よりも、前が見えなくなってしまっていると言える。

それだけ日本人、批判を恐れずに言うならば中でも男性は、会社という存在のウェイトが過度に重い生き方をしてきた。ただ、今、その生き方を様々な理由から見直す時期にきているし、見直すべきだと思う。

日本人の働き過ぎ、具体的には長時間労働と、有給取得率が少ないこと、過度にメンバーシップ型（※）になっていることを見直す機運が高まっている。昇進・昇格を前提としない働き方が模索されている。以前のように、出世に夢を持つ時代でもなくなったし、みんなが右肩上がりの働き方を望んでいるわけではない。男性の家事労働参加は国際的に見ると、まだまだ低い中、イクメンというムーブメントが盛り上がりつつある。もっとも、仕事が重い中、イクメンをやると、労働強化以外の何ものでもないのだが。

思うに、これからの生き方のヒントは、居場所の分散だと思う。会社「だけ」に居場所を求めるのは、昭和の生き方だし、家庭「だけ」に求めるのも現実的ではない。とはいえ、会社以外の居場所の面積を、少しでも増やす努力、これこそがこれからの男子の生き方ではないだろうか。これは仕事の効率化にもつながる。いかに会社から早く帰るか。時間を有限だと思うことによって、イノベーションは起こる。

そして、様々な喜びをいくつかの居場所から得ていく。こうすることによって、仕事にもより新鮮な気分で取り組むことができるだろう。もちろん、お金を稼ぐ場である会社はそれでも軽視できない居場所にはなりそうなのだが。

複数の居場所で生きる。これが21世紀型男子の生き方、働き方のポイントである。

※メンバーシップ型
職務、労働時間、勤務地などの制約、限定がない雇用。入社した企業の一員となることが大きな意味を持つため、就社型社員ともいえる。一方で、欧米、アジア諸国の多くは、職務、労働時間、勤務地などが限定的である「ジョブ型」。
（「産業競争力会議　雇用・人材分科会」資料より抜粋）

評論家・コラムニスト

常見 陽平

北海道札幌市南区出身。札幌南高等学校卒業後、上京。一橋大学商学部卒業。一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。リクルート、玩具メーカー、コンサルティング会社を経てフリーに。雇用・労働、キャリア、若者論などをテーマに執筆、講演に没頭中。2015年4月 千葉商科大学に新設される国際教養学部の専任講師に就任予定。著書に『リクルートという幻想』（中央公論新社）など。

札幌男子（サツダン）、これからの生き方

札幌で当たり前に生活し、当たり前に働く男性たちの声を聴いてみたいと思い、座談会を開催しました。彼らの思いから、共感や新鮮な気づきがあるかもしれません。
どうぞ札幌の男性たちの座談会をお楽しみください。

Iさん：40代。育休を積極的に取得するイクメン。
Kさん：50代。パートナーとの2人暮らし。
Uさん：40代。小6の娘と2人暮らし。
Sさん：30代。昨年子どもが生まれたパパ1年生。

―皆さん、それぞれ家庭の役割をお持ちかと思いますが、家族との関係について現状や理想をお聴かせください。

Iさん：僕はバンドも行っていて、仕事3分の1、バンド3分の1、家庭3分の1みたいなバランスで生活をしています。妻はそれを何も言わずに認めてくれています。しかも、子どもには、「パパが頑張って働いてくれるからおいしいものを食べたり買い物をしたりできるんだよ」と話してくれたり。自由にさせてもらえているのは妻のおかげなので、僕もできるだけ妻に対する感謝の気持ちを言葉にして伝えるようにしています。とても恵まれていて、今は理想的な状況にあると思います。

Kさん：私たちは、事実婚です。法律婚であろうと事実婚で相手が同性であろうと、またどこの国籍であってもいいと思っています。ただ、その中で私は、1人の異性との事実婚を選んだだけです。

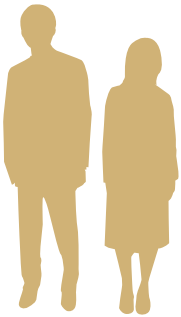
理想的な関係を言えば、相手の欠点とか、何がうまくできないとか、そういうのは些細なものとして受け入れることでしょうか。とにかく、パートナーがいるということ自体を無限の喜びとする関係です。もちろん現実はなかなか難しいのですが、理想郷をつくろうなんて力まずに、ゆっくり一歩ずつであれば、私たちでもできることがあるように思います。

なぜなら、私たちは、弱さを絆として、共に生きているのですから。

Uさん：私は、8年前から娘との2人暮らしです。シングルパパになって8年目になります。ひとり親家庭は、ぽつんとなったときには非常に孤立感や孤独感があるのだけども、結婚にこだわらないようなパートナーというか、同志と言っていいのかな、そういう関係づくりはしていったほうがいいだろうなと思います。ただ、世間体がそこまで認めていないところがあって、中途半端なつき合い方はやめなさいだとか、子どもの教育上よくないだとかと言う人も中にはいます。

Sさん：うちの場合は、異性間の法律婚で、いわゆるスタンダードと言われるものだと思います。特にうちの妻は、スタンダードな家族の形になろうとする傾向がすごく強いのですね。僕は、ふらふら生きていたので、そのままふらふら遊びに行ってしまったりします。そうなったときに、「小さい子がいるお父さんらしいことをしてください」と言われると、「うっ」となるんです。その正体はなんだろうと考えたときに、スタンダードを押しつけられるつらさがあると思うんです。結婚というのは、2人の内側向きのものであるのと同時に、外側の人に向けて、こういう2人ですというのを発信する機能があるのかなと思ったのです。

Iさん：僕は、25歳のときに一回結婚していまして、バツイチなんですよね。その当時子どもも居て、子どもは可愛かったのですが、妻が、「子どもが最優先、自分より子ども」という考え方でした。僕はまだ若くて、どうしてもその考え方を受け入れられなくて、子どもも大事だけれど自分も大事だからと、離婚を決断しました。でも今は、年を取ったせいもあるのか、その頃よりもちゃんと子どもに向き合えていると思います。自分でも随分変わったなと思います。



―年齢によって家族へのスタンスが変わってきたというお話がありましたが、働き方や仕事への姿勢に変化というものはありましたか？

Kさん：私は以前、公立の学校や社会教育施設で働いていました。公務員のため身分は安定していましたが、今は非正規雇用で働いています。努力してもうまくいかなかったときや、希望を持てなかったとき、しっかり悲しむ余裕がなかったということに随分後年になってから気づきました。悲しみや絶望を見ようとせず、より高く登ろうとがむしゃらに駆け上がって、結局は底に落ちてしまいました。そして、たくさんのものを傷つけたり、たくさんのものを失っていたということにようやく気づいたのです。

今も同じような仕事をしていますが、以前と比べれば質が変わったと思います。若いころのつきものがすっかり落ちたような感じで、とても静かに、穏やかな心持ちで働いています。

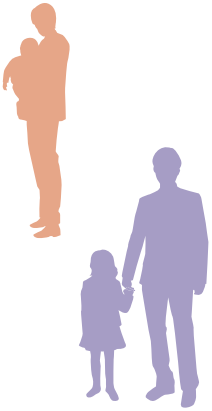
Sさん：僕は、仕事にそんなにウェイトを置いていないんです。なので、努力も時間も半分で成果が上がるんだったらほかのことをしたいなと思ってしまうんです。Iさんは、音楽もやられていて、音楽関係の仕事もされているじゃないですか。好きなことを仕事にするという感覚は、どんな感じなんですか。

Iさん：僕は、サラリーマンとして割り切って仕事をしている人間だったんです。でも、5年半ぐらい前に担当を始めた農業のプロジェクトが面白くて、とってもやりがいを持って働けるようになりました。その後に元々自分でもやっていた音楽のプロジェクトも担当するようになり。今はたまたま好きなことを二つ担当させてもらっていて、それはやっぱり楽しいですよ。

どうせやるのだったらと、自発的に考えて、自分がこうやったらきっと楽しいだろうなということを自ら進んで動いてみると、これまでとは世界が急に変わって見えました。仕事が急に楽しくなって、農業のプロジェクトによって僕の働き方も180度ぐらい変わりました。

Uさん：仕事は、やりがいがあるとかないとかというのは、そのときそのときの年代とか家庭環境にもかなり左右されますね。僕は、病院で救急救命チームで放射線技師をしていました。ある時点で、病院の経営のほうをやらないかと言われ事務長になったのです。要するに、現場から白衣を脱ぎました。そのときにはもう結婚していて、子どもが生まれていたので、養わなければいけないとなると、そこで簡単に転職するわけにもいかず、やりがいはないけれども、収入は安定していました。そういうときに、何の前触れもなく父子家庭になりました。1年間は、子どもがまだ幼稚園の年中組だったので、朝7時に幼稚園に送っていって、自分は病院に行って、幼稚園が1時半ぐらいに終わって、今度は幼稚園バスで保育所に行くんです。保育所で夜8時ぐらいまで見てもらって、自分の仕事を終わったら夜8時に保育所に迎えに行くという生活が1年ぐらいありました。だから、子どもと接していても、会話をしている時間がないし、親も子どもも疲れてきてしまっていて、それで脱サラしたんです。

今はまた医療法人の仕事に戻りましたが、ある程度の収入が確保できて、自分もやりがいがあるようなことをやりたいなと模索しています。



―皆さんは、地域でのつながりというのは密にありますか？地域で担っている役割などありましたら、教えてください

Uさん：僕は、PTA会長をやっているのですが、もっと町内会を活性化させたいと思って、今、おやじの会をつくって、会長もやっています。地なりの小学校のおやじの会と連携して、連合町内会を巻き込んで夏祭りで露店を出したりしていきたいと思っています。

Sさん：若い子たちを見ていると、SNSを使って上手に入っていったり、全く違うつながり方をしているんです。そこは、男性とか女性とかではないところだと思います。

そういう意味では、今まで地域に入っていなかった男性もすごく入りやすいシステムができつつあるんじゃないかなと思います。ただ、それを知っているか、知らないかだと思うので、広くみんなに知ってもらった上で、垣根なく入れるようになると、新しい意味での地域の活性化みたいなことができるんじゃないかなと思います。

Iさん：去年、町内会の班長だったんです。僕の町内ではほぼ100％加入しているんですが、本当に形だけです。町内会に誰も何も求めていないし、何となく形式的にお年寄りの方たちが役員をやっています。だから、そこに行っても、得られるものは何もないと思っている人が大半です。つながりがないんです。

一方で僕は、震災直後からチャリティーイベントを開催していまして、それは、北海道の農産物を販売して東北を応援しましょうということからスタートして、今はそこそこの規模の複合的なイベントになっているんですが、実行委員は全員がボランティアなんです。学生から僕より上の人まで、男女問わずいろいろな人が関わってます。何故みんながわざわざ大変な実行委員をしてくれるかというと、東北に対する思いだけではなく、そこに来ると自分の居場所があると思うから来てくれるんだと思うのです。それは多分、PTAでも町内会でも、何かのボランティアでも、仕事でも同じで、人とのつながりの中でこそ自分の存在意義を感じて、ここにも居場所がある、ここにも居場所があると、自分の居場所が少しずつ増えていって、そういうことが感じられるようなつながりが、たくさん生まれるといいなと思いますね。

—札幌の男子たちへ、こんな工夫をしたら生きやすいのではないか、自分らしく生きられるのではないか、というメッセージをお願いします。

Kさん：私は男ですが、いわゆる男として周りが認める尊大さや好戦性みたいなものは持ち合わせていないと思っています。別に、女になりたいわけではないのですが、一括りに、「男はどう求められているか」と問われると、ちょっと戸惑います。むしろ、いわゆる女性性とされるものに、とても安心を覚えますし、自分の中にあるそれを大事にしたい気持ちがあります。

子どものころは、男という生き方と女という生き方しかないのかなと勝手に思っていたところがあります。しかし、そんなことはなくて、自分は男以外にも、親から見れば息子であり、大人でもあり、夫でもあり、教育者でもあり、いろいろな役割を果たしています。誰にとってもそれぞれの役割はこの上なく大切ですが、周りから求められている役割像と、自分がそこでこうありたいという姿とは一致してないと思います。それに気づいているうちはいいのですが、気づけなかったり放っておいたりすると、だんだん重くなり、やがてのしかかられて潰れてしまうことがあるのです。そんなときに、本当にそれはやらなければならないことなのか、自分がありのままでできることは何かないのかということを自他に尋ねます。そうする中で、もっと楽で、もっと幸せで、もっと周りと豊かにつながっていける何かが見えてくるんじゃないかなと思っています。

Iさん：言葉は悪いですけれども、もっともっと世の中の人はみんな自分本位でいいのになといつも思っているんです。自分が気持ちいいか、気持ちよくないかがほとんど全ての判断基軸であって、気持ちよくなかったら気持ちよくなるためにはどうしたらいいかを常に考えているんです。自分が満足して自分がしっかりしていられるからこそ、ほかの人に目を向けたり、優しくなれたりするのであって、自分がダメな状態でいると、ほかの人に気を遣う余裕は全く生まれてこないと思うんですね。だから、もっともっと自分中心でいいというか、そうやって物事をシンプルに考えていくと、気持ちがとても楽になれるような気がします。

Uさん：何につながっているかだと思うんです。この時期はこういうネットワークに所属していたから助けられた、相談できた、お互いに高め合えた。だけど、ある時期になったら、そのネットワークではなくて、今度はこういう必要性が出てきたので、こういうグループや人とつながって、ここでまた自分を高められたとかとなると一番いい状態かなと思います。だから、フェイスブックやインターネットというアイテムをうまく使ってつながるのも今の時代はオーケーだし、趣味でつながるのもオーケーだし、何かのアイテムを使って自分からつながりを求めていくのが今の時代だと思います。

—札幌男子たちのリアルな声を聴いていかがでしたか？男性も女性も人とつながり、家庭や職場、地域で充実した暮らしができるために、一人ひとりがアクションを起こしていければと思います—

りぷるのススメ

このページではセンター職員がおススメする本をご紹介します。あなたのお気に入りになれたら嬉しいです。

SOCIALOGY

迫りくる「息子介護」の時代 28人の現場から

平山亮・上野千鶴子　共著

950円（税別）／光文社

「介護は女性が担うもの」という性別役割分担意識は根強く残っていますが、実際には介護しなければならない状況の男性が増えているのが現実です。本書では介護をしている男性へのインタビューから、仕事との両立や、地域との関わりなど、介護を通した男性の働き方を考える1冊です。

STORY

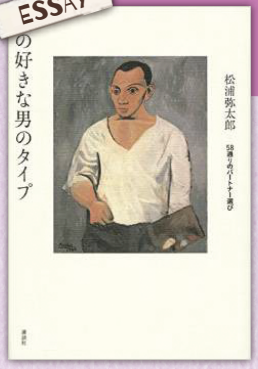
アラフォー男子の憂鬱

常見陽平・おおたとしまさ　著

918円（税別）／日本経済新聞出版社

常見陽平さん、おおたとしまささん、速水健郎さん、赤木智弘さん、という注目の若手評論家たちによる世代論。ガンダムやバンドブーム、Windows95、イクメン、…アラフォー世代視点の社会から、働き方、家族のあり方、教育などを見つめます。

ESSAY



僕の好きな男のタイプ 58通りのパートナー選び

松浦弥太郎　著

1,404円（税別）／講談社

「男性によって女性が語られる」という男女の主客関係はありがちですが、本書では、男性によって男性が語られます。『暮らしの手帖』編集長の松浦弥太郎さんが語る「僕の好きな男のタイプ」。女性向けの本ですが、男性も手にとってみると面白い視点があるかもしれません。

GUIDE

新しいパパの働き方 “仕事も家庭も!” 欲張りガイドブック

NPO法人ファザーリング・ジャパン

1,296円（税別）／学研マーケティング

「子育ても頑張りたいけど、仕事や趣味、パートナーとの関係も大切にしたい」、「子育てに積極的に関わりたいけれど会社の理解がなく時間がとれるか不安」、という男性にオススメの本です。新しいパパに必要なマインド、スキル、知識が、イラストや写真を見ながら楽しく学べます。

札幌エルプラザ情報センターを知っていますか？

札幌エルプラザ内にある「情報センター」では
男女共同参画を含めた4分野の資料を
閲覧したり借りたりすることができます（ご利用は無料です）。
マークが付いているものは情報センターで
借りることができますので、ぜひ遊びに来てくださいね。

情報センターへのお問い合わせは

011-728-1223

（開館時間 9:00～20:00
貸出時間 9:00～19:45）

札幌市男女共同参画センター相談窓口のご案内

札幌市男女共同参画センターでは女性のための 相談窓口を開設しています。
相談料は無料です。各相談では専門の相談員がお話をお伺いし、秘密は固く守ります。
1人で悩まずに、新たな一歩を踏み出すきっかけとしてお話ししてみませんか。

	女性のための 総合相談	女性のための 仕事の悩み相談	女性のための 法律相談	男性のための 悩み相談
日　時	月○○木○土 10:00～12:00 ○火○○○○ 15:00～17:00 ※ただし第2火のみ 18:00～20:00	○○水○○○ 18:00～20:00 ○○○○金○ 15:00～17:00	○○○○金○ ※ただし第1・3・4 第3金 13:00～15:00 第1・4金 18:00～20:00	○○水○○○ 18:00～20:00 ○○○○○土 13:00～15:00
相談員	カウンセラーなど（女性）	産業カウンセラー（女性）	弁護士（女性）	臨床心理士、産業カウンセラー（男性）
相談方法	面談／電話（728-1225）	面談／電話（728-1227）	面談	電話のみ（728-1331）
相談内容	家族のこと、夫婦のこと、恋愛、対人関係など女性の総合的な相談に相談員が面談または電話で対応します。	職場における対人関係、働き方、セクシュアル・ハラスメントなど、女性の仕事についての相談に産業カウンセラーが面談または電話で対応します。	離婚や相続など、法律的な見解が必要な女性の相談に弁護士が対応します。完全予約制なので事前にお電話でご予約下さい。 予約受付電話：728-1255	誰にも打ち明けられず、男性であるがゆえに抱え込んでしまう悩みを男性相談員が電話で対応します。

男性のための相談窓口を開設しています

札幌市男女共同参画センターでは、「男性のための悩み相談」を開設しています。男性の臨床心理士や産業カウンセラーが、家族との関係、生活や人生のことなど、男性であるがゆえに抱えてしまう悩み、……、男性ならではのご相談に対応いたします。

相談時間内に電話をかけていただくと、直接相談員につながりますので、ぜひ気軽にご利用ください。

日時：毎週水曜日18時～20時
毎週土曜日13時～15時

電話：（〇一一－七二八－一三三一）

お問い合わせ
札幌市男女共同参画センター事業係
TEL：(011)728-1255
Mail：jigyou@danjyo.sl-plaza.jp

編集後記

札幌男子の常見さんの特集記事、そして座談会の皆さんのお話はいかがでしたか？

男女共同参画と聴くと、女性の問題というイメージが強いかもしれませんが、女性だけではなく、男性もまた「男性らしさ」に縛られるし、生きにくい社会と言えます。男女共同参画は、女性にとっても男性にとっても、多様な性自認の人にとって、生きやすい社会を目指しています。ぜひ、男性もいっしょに札幌の男女共同参画を進めていきましょう！

発行月：平成27年2月
発　行：札幌市男女共同参画センター
【指定管理者:公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会】
Facebook：http://www.facebook.com/pages/札幌市男女共同参画センター/377759212234904
所在地：〒060-0808
札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ内
電　話：(011)728-1255　FAX：(011)728-1229
ホームページ：http://www.danjyo.sl-plaza.jp

本誌のタイトル「りぷる」は、英語（ripple）で「さざ波」という意味です。男女共同参画の意識がさざ波のように、少しずつ広がって欲しいという想いを込めました。